

東京に緑を残したいと思っていても、私有地の場合、相続などで持ちこたえられなくなり、結果として緑が減少する・・・ということがよくあります。それをなんとかできないかと、頭を悩ませている方は多いことでしょう。練馬区のOさんも、その一人でした。

3人姉弟の2番目で、結婚してからも実家に住むことになりました。そこには武蔵野の雑木林の面影を残す小さな庭があり、両親が大事にしてきた緑の空間を、この先も守っていきたいと、日々考えていたそうです。ご両親が亡くなってからも、その土地に関する管理を姉弟たちから任されて、何とかやりくりしてきたのですが、その後のことを考えると、だれが守っていくのか、先代が愛したこの自然を、この後も残していけるだろうかと年々不安が増していきました。

そんな時に目に飛び込んできたのが、区の緑地課主催のセミナーのチラシ、緑を残し活用するといったテーマでした。そう、この緑を生かしていききたいのだと、ピンときたOさんは、さっそく申し込み、セミナーを受けた後、自分の悩みを講師の先生に相談したのです。講師の先生はすぐに、見に来てくれたとか。庭を案内しながら、この先も、何とかこの自然を守る方法を考えたいと思っていること、この地域には、家と庭が作る緑を、お茶やお菓子と共に楽しみながらめぐる「ちやい旅」というミニ散歩のプロジェクトがあり、それに参加していること等、思

No.55  
須磨 佳津江の  
び・まち・みどり

東京に緑を残したいと  
考えたこと

いの丈をぶつけると、講師の先生は、いろいろなプランを立ててくれ、そのひとつが、「緑の環境プラン大賞」のポケットガーデン部門への応募でした。「ちやい旅」の方々にも参加・協力してもらい、庭の奥の部分を開開空間に変えるプロジェクトとして応募したところ、見事国土交通大臣賞を受賞したのです！

受賞がきっかけとなり、プロジェクトが動き出したのは昨年のこと。地域の仲間が集まってきて、庭の奥にはびこった笹刈りからスタートし、その後、公開の庭に向けて入り口や通路の工事が始まり、樹木の整理や草花の補植など、着々と作業が進んでいきました。



オープンの日は大勢が集まって賑わった。

もともとガーデニングが趣味というわけではなく、自然の中を散策し、山野草を愛でるのが好きだそうで、庭にあるのは、そうした楚々とした花ばかり。大きな桜や紅葉を生かした自然風の小さな自然散策路となり、ベンチや、落ち葉置き場が置かれ、多くの仲間の力を結集して、誰もが集えるポケットガーデンが完成しました。2018年5月のオープニングパーティーには大勢が集い、盛り上がったということです。

庭の広さはおおよそ100坪、公開しているのはそのうちの40坪くらいというポケットガーデンですが、そこに自然があるからでしょう、シジュウカラ、エナガ、オナガ、ヒヨドリ、ムクドリ、たまにはウグイスもその庭を訪れます。実は、セミナーに参加した日は、夫が亡くなってまもなくのこと、悲しみの癒えない中、行くことをためらう気持ちもありましたが、「きっと夫が背中を押してくれたのだと思います。皆さんに喜ばれることが励みになって、寂しくなくなったから・・・」と、穏やかに微笑まれました。庭の一部を改造したポケットガーデンが、地域に開かれた自然として生まれ変わったことで、今後も、地域の緑として、末永く継続しますようにと、祈っています。

① ポケットガーデンの入口に立つOさん。入口を入るとすぐに白いベンチがある。② 入口は階段の他に車いすにも対応したスロープも配置。③ ポケットパークに続く母屋の庭。春にはカタクリ④やニリンソウ⑤が咲く。

